

様式【学校評価資料】

学校評価目標	具体的計画	令和5年度の達成基準	自己評価(中間)		自己評価(最終)		学校関係者評価
			達成状況	評価	達成状況	評価	
1 学びプロジェクト	主体的に学び合いながら、分かる喜びを感じる児童を育てる。 ・児童に話す・聞くことについての視点を示す、意識的に交流し合う場を設定する、デジタルツールを活用する。 【礼儀正しい子供】	同内容項目のアンケートで児童が意識した割合と職員が意識して指導した割合が A:85%以上 B:70%～85%未満 C:70%未満	保護者アンケート「子どもは授業が分かりやすいと言っている」に対して、肯定的な回答が91.3%である。また、児童アンケート「授業は分かりやすいですか」に対して、肯定的な回答が97.1%である。 職員アンケート「主体的で対話的な深い学びを意識した授業づくりを行った」と「児童が、協同し合いながら学習できるような授業づくりを行った」では、肯定的な回答がどちらも80.0%である。また、「授業等でGIGAパソコンを積極的に活用した」では、肯定的な回答が70%である。 保護者アンケートと児童アンケートでは、達成基準に到達しているが、職員アンケートではBにギリギリである。	・達成状況を見たときに、数値で気になるのは職員アンケートである。自分に厳しい教員に対して、もっと具体的な改善策を提示する必要がある。そこで、次の3つを提案する。 1:クラスに掲示してある発表の雛形を活用し、11月末までに学級の半数以上の児童が雛形を見ないで使えるようにする。 B 2:1日に2時間以上は協同学習の時間を作る。 3:GIGAパソコンを使う場を、原則毎日設定する。	7月アンケートに比べて、12月アンケートでは、児童アンケートで、「場に応じた声の大きさ」の項目以外はよくなっているか同じ割合であった。保護者の回答も、上がっている項目が多い。 課題であった職員アンケート「児童が、協同し合いながら学習できるような授業づくりを行った」は、肯定的な回答が上がり、100%となった。しかし、「授業等でGIGAパソコンを積極的に活用した」では、肯定的な回答が、担任は向上しているが、担任外の回答が下がっている。	・11月に総社市の授業公開として「サテライト研修会」を実施した。こうした公開授業の場は、児童に自分たちの授業の様子を見ていただけるという学習意欲を向上する場となりやすい。本校の児童の回答が、全体的によかったのはその理由もあると思われる。今後は、校内外の職員から見てもらう場を増やし、児童の意識の高まりを目指したい。 ・中間期の改善策で提案した「1日に2時間以上は共同学習の時間を作る。」に関しては、話す人の方を見るという基本的な部分で向上が見られた。さらに、こうした場を増やすことで、社会で求められる「主体的で対話的な深い学び」を推進していかねばならない。また、GIGA端末の活用をさらに推進することで、「個別最適な学び」をより良い教育の場に位置づけることができる。そのため、今後本校において、GIGAパソコンを使う場の工夫をさらに改善する必要がある。	○自己評価は適切である。 ・今年度から評価基準を85%と今年度設定しているため、他のプロジェクトと数値的な目標に違いがあっても2年は同じ基準で実施するほうがよい。 ・探究的な学びを進めていくことが大切であり、授業内容のレベルアップを進め、研修を深めて行ってもらいたい。
	学びの基礎力となる学習習慣を身につけようとする児童を育てる。 ・家庭でも自主的・計画的に学習ができるよう、発達段階に応じて、AZOノートなどのノートの工夫、GIGA端末の活用を図る。 ・AZOノートの具体例を示したり、家庭への発信を行ったりすることで、児童が意欲的に学習に取り組めるようにする。	同内容項目のアンケートで児童が意識した割合と職員が意識して指導した割合が A:85%以上 B:70%～85%未満 C:70%未満	保護者アンケート「子どもは家に帰って、各学年の目標時間、勉強している」に対して、肯定的な回答が73.9%である。また、児童アンケート「家に帰って学年の目標時間家庭学習をしていますか」に対して、肯定的な回答が85.7%である。 職員アンケート「児童が家庭学習で目標時間以上学習できるよう、保護者への啓蒙を行った」に対して、肯定的な回答が60.0%である。	・達成状況から、教職員の働き掛けを増やすことで、保護者の数値も上がると考えられる。そこで、発達段階を考慮しながら次の2つを提案する。数値で気になるのは職員アンケートである。自分に厳しい教員に対して、もっと具体的な改善策を提示する必要がある。そこで、次の2つを提案する。 C 1:連絡帳等に家庭学習を提示した横に(分)の欄を設け、児童に宿題の合計が目標時間以上になるようにあらかじめ計画を記入させる。 2:GIGA端末を持ち帰らせた折に、学習課題を個別に割り当てたり、AI機能のあるドリルパーク(3年以上)を活用したりして、個に応じた指導のさらなる充実を図るようにする。	7月達成の割合が低かった保護者アンケート「子どもは家に帰って、各学年の目標時間、勉強している」と、児童アンケート「家に帰って学年の目標時間家庭学習をしていますか」の、肯定的な回答が上昇した。保護者の回答も上昇したが、数値目標Aに達成できなかった。 職員アンケート「児童が家庭学習で目標時間以上学習できるよう、保護者への啓蒙を行った」に対して、肯定的な回答が85.7%になった。	・中間期での具体的な改善策等を教職員が実施することで、児童や保護者のアンケート数値が上がったと考えられる。しかし、経年経過の数値を見ると、さらに上を目指すことは可能であると考えられる。本年度実施したAZOノートを児童相互に見せ合う「AZOノート展覧会」を今後も実施し、来年度も児童の主体的な家庭学習を促す工夫が必要である。また、GIGA端末の活用は、家庭学習にも生かすことができる。そのため、家庭学習でのGIGAパソコンの有効的活用を研修する機会を設けて、児童が意欲的に家庭学習に取り組めるような配慮をする必要がある。また、中間期に記載した個に応じた指導をさらに発展させ、個別最適な学びの充実を図るようにすることが課題である。	○自己評価は適切である。 ・以前よりも数値的に伸びてきており、AZOノートの取り組みは継続してもらいたい。家庭学習については保護者に関わってもらうことが課題となる。 ・内容の充実をしていくことやノートの評価をしていくことが大切である。
	学校生活の様々な場面で、みつけ玉、ねばり玉、しんせつ玉を磨くことができる児童を育てる。 ・心を整え、落ち着いた雰囲気、心の橋を築くことができるように、5分前に行動することを意識した指導を行う。 ・阿曾流自問掃除に継続して取り組む。	同内容項目のアンケートで児童と職員が意識して取り組んだ割合が A:80%以上 B:70%～80%未満 C:70%未満	・児童アンケートからは5分前行動や自問掃除について「できている」と「まあできている」を合わせると概ね90%以上という肯定的な回答がされている。この項目には掃除時間や授業の開始時間だけでなく、下校の集合時間も含まれる。そのため教員の目から見るとまだまだ集合時間に安定して間に合っているとは言えない。その点を含めて中間評価をBと考えた。	・時間に関しては、まだ教員からの働きかけが必要であると考えられる。そのため、掃除や下校の集合には児童がゆとりを持って行動できるよう、早めの時間設定を教員が行う。 ・阿曾流自問掃除の意識の向上のために、6年生が班の垣根を超えて周囲の下級生への関わりを増やしていく。 ・教員からの働きかけも必要である。同時に教員が教育計画を改めて確認し、取り組み方を共通認識をした上で全員が同じ指導をしていく。	・児童アンケートの結果から5分前行動が92.2%が「できている」「まあできている」と肯定的な回答をしている。数値が7月のアンケートと同数であった。 ・自問掃除に関しては、「ねばり玉」「見つけ玉」を磨いているかという質問に肯定的な回答がそれぞれ98.3%、97.4%と回答があった。 ・教員の自問掃除に対する指導の意識は100%で学校全体で自問掃除に取り組んでいると言える。	・児童アンケートの結果から、5分前行動や自問掃除に関する評価はAとなるが、学年により達成状況の客観的評価は「B」に留まる。くり返して継続した指導が必要とされる。 ・時間に関しては、来年度から掃除の時間が変更され、掃除と昼休憩の順番が入れ替わるため、5時間目が時間通りに始めやすくなるのではないかとと思われる。 ・時間を意識した行動が苦手な児童は、どの学年にも数人おり、業間休みと昼休憩後に教室に戻りにくい傾向にある。教員が運動場に出て遊ぶ機会を設け、時間になれば残っている児童に声をかける。時間になったら予鈴や音楽を流すなどの対策が必要である。	○自己評価は適切である。 ・自問そうじの取り組みによって落ち着いて行動できることにつながっており、良い伝統を築けている。 ・時間を守ることの意義や目的について児童にしっかり伝えていくことが大切である。
心が通うあいさつや時と場に応じた相手を思いやる言葉遣いができる児童を育てる。 ・相手を大切に思う気持ちがもてるように、「先言後礼」で授業の始まりや終わりに相手の目を見てあいさつする指導を行う。 ・相手を尊重する気持ちが育つように、授業中や活動中に「さん」を付けて友達の名前を呼ぶことができるように指導していく。 【心優しい子供】 【礼儀正しい子供】	同内容項目のアンケートで児童と職員が意識して取り組んだ割合が A:80%以上 B:70%～80%未満 C:70%未満	・児童アンケートの結果から、先言後礼のあいさつは「できている」「まあできている」を合わせると86.4%の児童が肯定的に回答している。発達段階的には、低学年は休憩や帰りの前はそわそわしており、中学年は概ねできており、高学年はほぼできている。日常のあいさつも向上させるべく、来客など誰にでもあいさつできるように児童の育成を図りたい。 ・友達の呼び方に関しては、どの学年も活動中によく意識しており、きちんと「さん」つけて呼ぶことができている。引き続き指導を続けていきたい。	・あいさつ、呼び方共に今の調子で、引き続き指導していく。 ・計画委員会を中心にあいさつ運動を継続して取り組んでいる。具体的な活動内容を委員会でも2月末までにまとめて、来年度も阿曾小の伝統として、継続して取り組めるような形にしていきたい。	・「地域の人に自分から先に、相手に聞こえる声であいさつをしているか」という項目に肯定的に回答した児童は92.2%で、7月よりも5.8%増えていた。 ・「活動時に、「くん」や「さん」をつけて友達を呼んでいるか」という項目に90.4%が肯定的に回答している。	・あいさつ、「くん」「さん」をつけた呼び方のいずれもよくできるようになっている。そのため、達成状況を見直し、より高い目標を児童に提示してもいいのではないかと考える。 ・あいさつに関しては、声の大きさやその場に止まってあいさつをするなどに気を付けることができると、よりよいあいさつになる児童もおり、改善の余地が見られる。あいさつ運動を継続していき、適切なあいさつを身近に感じられる環境づくりを続けていきたい。	○自己評価は適切である。 ・地域でも挨拶をしている様子をよく見る。子どもも相互により関わりができている。子どもたちは交流を通して認めることで自尊心が育つ。褒められることを素直に受け入れられるような子どもたちを育ててほしい。	
阿曾地域の方々、自分たちの学校生活が支えられていることを知り、共に活動したり関わり合ったりすることを通して感謝やお礼の気持ちをもち、伝えられる児童を育てる。 ・ボランティア活動の様子を、学校だよりやHP、GIGA端末での共有などを通して、児童や保護者に伝える。関わって下さった方々へのお礼の気持ちを書き込んだり、手紙を書いて届けたりすることに取り組む。 【総社を愛す子供】	同内容項目のアンケートで、児童ができた割合が A:80%以上 B:70%～80%未満 C:70%未満	児童アンケートの結果から、地域がボランティア活動をして下さっていることについて「ありがとうの気持ちを伝えた」と肯定的な回答をした児童が約82%いた。また、ボランティア活動の様子をHPやGIGA端末で共有や発信をした。環境ボランティアの方と協同で作業する場を設け、1年生については実施することができた。手紙については昨年度より継続しているが、1学期には十分な取り組みができなかった。	環境ボランティア、読書ボランティア、学習支援ボランティアといった活動で関わって下さる方々と児童とが共同作業や手紙などのやり取りを通して関係を楽しんだり、児童が感謝の気持ちをもって接したりすることができるように、活動を計画して実施する。地域の方に目を向け、感謝の気持ちを表すような週目標を設定し、お礼の気持ちを伝えられることを強化する週間を設ける。担任から地域のボランティアの方々についての話をします。	児童アンケートの結果から、中間期に地域がボランティア活動をして下さっていることについて「ありがとうの気持ちを伝えた」の内容に肯定的な回答をした児童が約82.1%から94.8%に向上した。	中間期以降に環境ボランティアの方々月に1回の割合で共同作業を実施し、その際に感謝の手紙やお礼を述べる場を設けたことで、子どもたちと地域の方との関わりがもてた。また、読書ボランティアや学習ボランティアに来ていただいた方にもお礼の伝えることができた。	○自己評価は適切である。 ・体験をすることで感謝の気持ちを持つことができるので、共同作業の取り組みはよい。地域・保護者との関わりの中で、感謝の気持ちを育てて行くことを続けてほしい。	
お互いに考えや意見を伝え合える、風通しの良い職場づくり。 ・コンプライアンス研修を通じた規範意識の高揚やお互いに抱えている困難さなどについて、共有・理解し、支え合おうとする関係性づくりを行う。	同内容項目のアンケートで、職員が意識した割合が A:80%以上 B:70%～80%未満 C:70%未満	職員アンケートの結果から、「コンプライアンス順守の意識を持ち、職務にあたることのできた」「他の職員を思いや困難さを知り、関わっていくこととした」については、肯定的な回答が100%であった。一方、「自分の思いや困難さをほかの職員に伝えよう」としたり、相談したりした」については90%以上肯定的な回答であったが、一部否定的な回答があった。	継続的にコンプライアンス研修を行うことを進めながら、推進委員以外にも研修の進行役を分担するなどして自分事としてとらえられるような工夫を今後も図る。コンプライアンス研修に合わせて、職員の思いや困難さをほかの職員に伝えようとして、相談したりした」に関しては、面談などを通して相談できやすい環境づくりに努めるようにする。	「コンプライアンス順守の意識を持ち、職務にあたることのできた」「他の職員を思いや困難さを知り、関わっていくこととした」や「自分の思いや困難さをほかの職員に伝えよう」としたり、相談したりした」に関して、100%肯定的な回答が得られた。	コンプライアンス研修を担当を割り当てての研修を行った。時事的に話題となった内容を取り上げて研修を図るなどの創意工夫を行い、自分事としてとらえることができるように、今後内容の充実や研修方法の工夫を図っていく。いづれの質問内容についても肯定的な回答は100%となったが、「そう思う」に当たる割合が高くなるように今後も風通しのよい職場づくりを目指していきたい。	○自己評価は適切である。 ・職員がお互いに助け合うことができる風通しのよい職場作りにも今後努めてもらいたい。助けてもらえてよかったという声を伝え合っていく。コンプライアンスの遵守などはより高いレベルの意識を持つことが大切である。	